

信浄寺だより

93号 二〇二五年十月

浄土を想う

今年の夏もたいへん暑かったですね。年々気温が高くなっているようです。少しでも涼しい場所はないかと考えてしまいます。最近、ときどき頭に浮ぶのですが、お経の中に氷の世界が出てくるところがあります。『仏説観無量寿経』というお経の中に釈尊が極楽浄土を見たいと願う韋提希夫人いだいけのために、まず夕日が沈むのを見て浄土を見て、次に水を思い描いて浄土を見ることを勧めます。

「水の澄みきったようすをはっきり心に思い描き、心を乱さないようにするのである。水を思い描きおわたなら、次にその水が氷となったようすを想うがよい。……」

これを水想観といってここから極楽浄土の澄みきったようすを想像するのです。そのあと、地想観、宝樹観、宝地観、…と続いていきます。韋提希夫人は、釈尊在世の頃のインドにあったマガダ国の王妃。子供である王子、阿闍世あじやせが悪友にそそのかされて

父の頻婆娑羅王びんばしやらおうを捕らえて牢獄に閉じ込め、秘かに食事を運んでいた母も殺そうとします。その苦しみの中で釈尊に救いを求め、極楽浄土に生まれることを願った夫人に説かれたお話です。

このお説法は、韋提希夫人だけではなく、すべての人に向けてのお話です。現代に住む私たちにも必要なお説法なのです。最初の夕日を見て浄土を想い描くのは、日想観といって、春、秋に真西に沈む夕日を見て浄土を想うのが、お彼岸の日です。彼岸とは浄土のことです。日頃お浄土を想うことを忘れがちな私たちにせめてこの日は考えましょうという日なんです。

日想観から始まって浄土の環境を思い描き、その後そこにいらつしやる菩薩、仏（阿弥陀仏）を見ていくのです。これが十三観まで続きます。これを精神を統一してすべてを見ていく（観想）方法もありますが、われわれ普通の人間にはできそうもありません。私たちには、お浄土を想うご縁（きつかけ）になれば、日頃出逢うもろもろのことからお浄土とは何かを考えていきたいと思えます。

極楽、地獄といいますが、普通は死んでから先の話だと思っています。またそんなものがあるのかとも考えます。しかし地獄とはこの世界で起こっていること、戦争など。飢えに苦しむ人たち、相手をののしりあう人たち。仏教では、地獄、餓鬼、畜生の世界と説かれています。地獄は死ぬときに裁判で（閻魔大王など）決まると考えますが、今生きているこの世界で人間が自ら作って、堕ちていくのではないのでしょうか。知らず知らずのうちに私自身が作ってしまう、皆が仲良く平和に暮らせるにはどんな世界がいいのか、そんなことも考えてみませんか。

親鸞聖人はそんな私たちに、仏法に遇うことで自分の中に潜む悪の心を知られ、難しい行（ぎょう）などできない者のための「悪人正機」（悪人こそが救われる）を示されました。悪人正機というのは、まずそんなあなたを救いたいと願われた阿弥陀仏の願い（本願）のことです。

お経にはいろいろな方法で浄土が説かれています。私にとってお浄土とは「まず考えてみませんか。」

『仏説観無量寿経』 心をしずめ、思いをこらして、極楽浄土のすばらしいありさまと、そこにいます万徳をそなえられた無量寿仏のお姿とその救済のはたらきを心に思い描き、その徳をわが身に体得しようとする「観仏」の行が説かれている「経」の意味で名づけられました。

帰敬式のご案内：本願寺岐阜別院にて、帰敬式（おかみそりを受け法名をいただく）が行われます。まだ受けられていない方は、是非いかがでしょうか。

日 時 十二月五日 午後六時執行（参集 午後五時三〇分）

帰敬式後、七時からの報恩講初夜法要にご参拝ください

費用 成人 一万二千元 未成年 七千元

申し込み締め切り 十月二十日までに信浄寺へお願いします。